

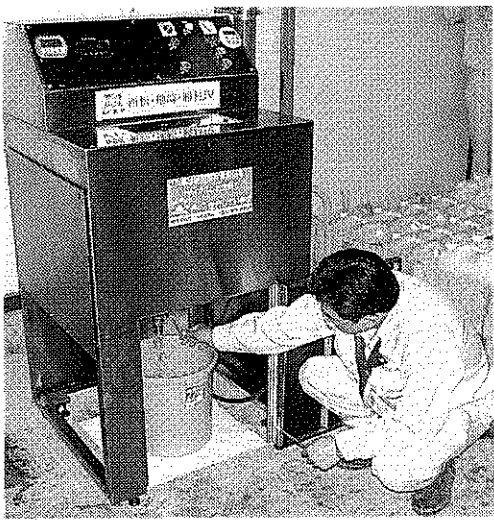
道内で使い済みの植物性廃食用油などを使ったバイオディーゼル燃料（BDF）を導入する動きが活発化してきた。地球環境問題への取り組みになるほか、このごろの原油高で軽油価格が上昇し、割安感も出てきた。道内の広大な土地を使って原料となるナタネを栽培する「ナタネ油田」の実証実験も昨秋から始まり、道内の地域特性を生かした新エネルギーの創出にビジネスチャンスをうかがっている。

【昆野淳】

植物油原料の燃料

BDF導入活発化

環境対応、原油高で割安感



煙の発生量も少なく、廃食用油リサイクルの手段としても期待されている。大手ゼネコンの西松建設（東京）は4月から、空知管内新十津川町で建設している徳富ダム工事車両用の燃料として導入した。建設工事現場にBDFが導入されるのは全国でも初めて。約15キロ離れた現地事務所から作業員を搬送するワゴン車2台と、散水車の燃料に使用する。

廃食用油を入れた精製装置からバイオディーゼル燃料を製造する西松建設の社員は、新十津川町の徳富ダム建設工事出張所で

BDFは植物油を原料としたディーゼル車の代替燃料。植物系燃料のため地球温暖化防止協定上の二酸化炭素（CO₂）排出量としてはカウントされない（カーボンニュートラル）が、実際にも軽油より10%程度低減できる。また、排ガスの硫酸酸化物（SO_x）や黒

現場で使うBDFは、町内の給食センターなどの公共施設から廃食用油を収集。事務所に市販の燃料精製装置を設置し、年間6キロ弱を製造する。

廃油の収集コストはかからず、職員が製造するため新たな人件費も発生しない。ただ、製造するのは週1回程度にとどまることから、装置の減価償却費を含めた製造コストは1リットル160円とやや高めになる。

同社は年間数万円程度の持ち出しにはなるが、地域の環境保全に貢献できる」（白井靖幸・徳富ダム出張所副所長）と期待する。4年後のダム完成までに他の建設機

械への使用も検討する。昨年からBDFの製造を始めた札幌市のリサイクル業者（K's（ケーズ））は6月末に精製設備を増強し、本格生産に着手する。すでに居酒屋のつばやや受託食堂運営のどうきゅうなどの市内の外食チェーンから廃食用油を収集する態勢を整えており、年間300キロの生産を目指す。

ワイークンリー

経済 夢の未来

製造したBDFは市内の老人ホームや幼稚園の送迎用バス燃料として市価より1リットル10円程度安く販売しており、利用者の評判は上々という。黒木一哉社長は「事業面では何とかやっているというところだが、まずは市内の普及を第一に、資源循環型の街づくりを実現させていきたい」と話す。

また、民間シンクタンクの北海道総合研究調査会（札幌市、HIT）は、空知管内栗沢町と留萌管内遠別町の計2カ所を使い、BDFの原料とする